

レガシーシステムを AIの原動力に変える最短ルート

データモダナイゼーション実践ガイド



なぜ今、 データモダナイゼーションが必要なのか

◆ データモダナイゼーションの現状

企業の基幹システムには、重要なデータが膨大に蓄積されています。ビジネスに貢献する意思決定を加速させるためには、このデータを適切に活用することが重要です。とくに近年は、AIの台頭によって「レガシーシステムに眠っているデータをもっと有効に活用したい」「AIを活用したデータ分析でもっとビジネスの幅を広げたい」という考えが進みました。

しかし一方で、「レガシーシステムを刷新したいが、もともとのシステムが煩雑化しており移行が難しい」「時間もコストもかかる」とのような課題から、なかなかデータモダナイゼーションを進められない企業が少なくありません。

本書では、基幹システムのデータを安全に活用するための手法と、データモダナイゼーションを実践するための考え方をご紹介します。

◆ データモダナイゼーションとは

データモダナイゼーションとは、古くなったレガシーシステム全体を刷新するのではなく、既存のシステム環境を活かしながら「データ」に焦点を当てて近代化（モダナイズ）を図るアプローチです。データフォーマットの変換や連携・同期方式の最適化を行うことで、既存システム内に眠っているデータを最新の状態で安全に取り扱えるようにし、AIやデータ分析などに活用しやすくします。

◆ システム連携をスムーズに

レガシーシステムからクラウド環境などへ移行することで、データの処理速度が向上し、サイロ化されていたシステム間の連携がスムーズになります。これにより、AIやBIツールを用いたリアルタイムなデータ分析が可能となり、データ駆動型の迅速な経営判断（データドリブン経営）や、市場の変化に応じた新規サービスの早期創出が実現します。

目次 INDEX

- 01 はじめに
- 02 市場のリアル / アンケート結果
- 03 データモダナイゼーションの課題と基本方針
- 04 戦略的アプローチの全体像
- 05 STEP1 / 抽出
スマートなデータ抽出
- 06 STEP2 / 品質チェック
データの信頼性とAI判断
- 07 STEP3 / 変換・連携
柔軟な変換とノーコード開発
- 08 STEP4 / 運用
業務オーケストレーション
- 09 ソリューション紹介
- 10 導入事例 /
セブン銀行様

現場が感じるデータモダナイゼーションの課題と期待

データモダナイゼーションの必要性が高まる中、現場ではどのような認識が共有されているのでしょうか。本書の執筆にあたり実務家の意見を収集したところ、モダナイゼーションに関するリアルな傾向が見えてきました。

モダナイゼーションに対するアンケート結果

Q. 一般的にモダナイゼーションとは何をイメージするか

A. レガシーシステムやシステムの刷新

Q. 現在モダナイゼーションを進めている、又は検討中のシステム・業務領域は何か

A. 基幹、データ分析

Q. モダナイゼーションが難しい、したいけど他の優先事項があるから見送っているシステムや業務領域は何か

A. 基幹・勘定系システム

Q. モダナイゼーションを推進する際の主なハードルや課題は何か

A. 基幹システムならではの技術面での
人材不足、セキュリティ、コストや時間がかかるのに費用対効果がでにくい

Q. モダナイゼーションを行うためのデータ連携をどうしたらよいか

A. 部分最適化や紙媒体

アンケート
結果を受けて

今回の意見収集からは、「基幹システム」をはじめとするレガシーシステムのモダナイゼーションに対する関心や期待の高さがうかがえます。



システム刷新ではなく、「データ」にフォーカスする4つの階層思考

具体的にモダナイゼーションを進めるポイントは「業務プロセス変換」「アプリケーションロジック変換」「データフォーマット変換」「データ同期方式変換」の4階層です。その中でも、どのようなデータでも取り扱えるようにする「データフォーマット変換」、そしていつでも最新状態で見られるように「データ同期方式変換」を行う機能を、本書ではデータモダナイゼーションの範囲としました。

課題

既存環境に手を加えた場合の
影響範囲が分からない

投資対効果が出にくい

期間がかかる

方針

既存環境をそのまま生かす

投資費用は最小限に抑える

短期間で立ち上げる

モダナイゼーション全体のアプローチ

本書の範囲

業務プロセス変換

業務の流れを最適化する

業務プロセス変換

e.g. 注文処理フローの変換
e.g. 顧客サポートプロセスの変換
e.g. 人事異動手続きの変換

アプリケーションロジック変換

データの内容を必要な形に変換する

アプリケーションロジック変換

データフィールドマッピング
ビジネスツールの適用(四則演算など)
データバリデーション

データフォーマット変換

データを取り扱える状態にする

データフォーマット変換

文字コード/エンコード変換
ファイルフォーマット変換
通信プロトコル変換
日時フォーマット/単位/Geoコード変換

データ同期方式変換

業務の流れを最適化する

データ同期方式変換

バッチ
ストリーミング
イベント連動

既存環境を活かし、低コスト・短期間で 立ち上げるための4ステップ

◇目的と課題

生成AIを活用して自社のビジネスを深く分析するには、既存の「レガシーシステム」に眠っているデータを連携させる必要があります。しかし、古いシステムにあるデータを新しいシステムでそのまま利用することはできず、大きなハードルが存在します。

Data Modernization



◇データ連携と運用の4つの手順

レガシーシステムからモダンシステムへデータを渡し、継続的に運用していくためには、下記の4つのステップで進められます。



◇データモダナイゼーション4つの手順 詳しくは各ページをご覧ください



STEP 1 ...P05

データの「抽出」

レガシーシステムから必要なデータを取り出す



STEP 2 ...P06

品質チェック

データの正確性や欠損などを確認する



STEP 3 ...P07

変換・連携

モダンシステムで利用できる状態に整えて渡す



STEP 4 ...P08

運用管理

分散したシステム連携の運用を一元的に統合・管理する

APIリクエストによるリアルタイム連携と、AIを活用した非構造化データのテキスト化技術

モダンシステムからデータを取得するたびにレガシーシステム側で開発を行うのは、コストも時間もかかり非現実的です。そのため、以下の仕組みで効率的にデータを抽出します。

APIによるオンデマンド連携

モダンシステム側からAPIリクエストを送り、リアルタイムに必要なデータを取得します。その際、レガシーシステム側で事前にデータの外部出力を行うなどの静止点ファイルを用意しておく仕組みが理想的です。



レガシーシステムはデータ準備のみで開発不要
モダンシステム側からリアルタイムなオンデマンド連携

非構造化データのテキスト化

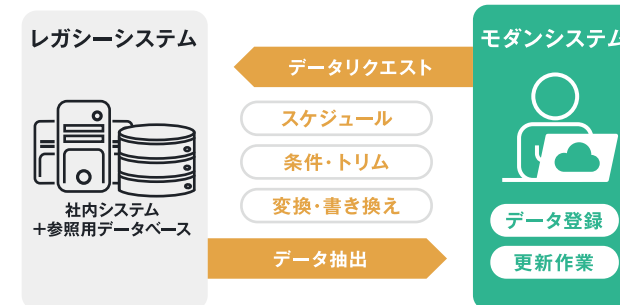
PDFの手書き資料や表形式のデータは、AI (AI-OCRなど) を活用してCSVやテキストデータに変換し、抽出可能な状態にします。



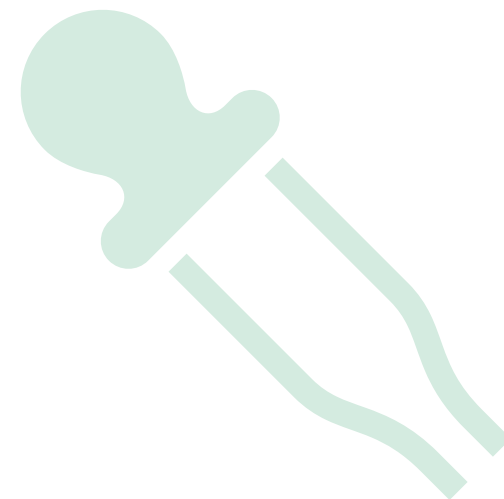
手書きスキャンPDFからもテキスト情報を抽出
AI-OCRのように属性設定をしなくても抽出可能

GUIベースの条件指定

抽出のたびに開発しなくて済むよう、モダンシステム側の画面(GUI)から文字列検索や日付などの抽出条件を簡単に指定できる仕組みを構築します。



データ抽出方法はGUI操作で選択可能



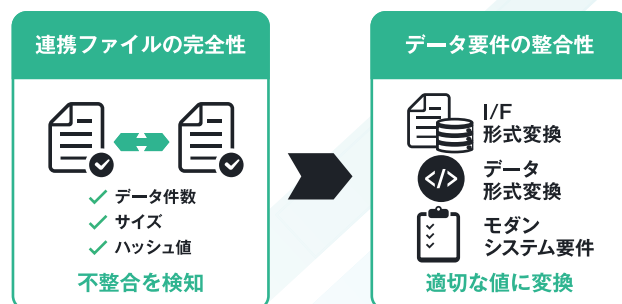


ファイル・データ整合性の自動チェック。 AIによるエラー分析と判断により「出社不要」の運用を実現。

抽出したデータは、そのままでは信用できないケースがあるため、信頼性を高めるチェック機能が必要です。

ファイルの整合性

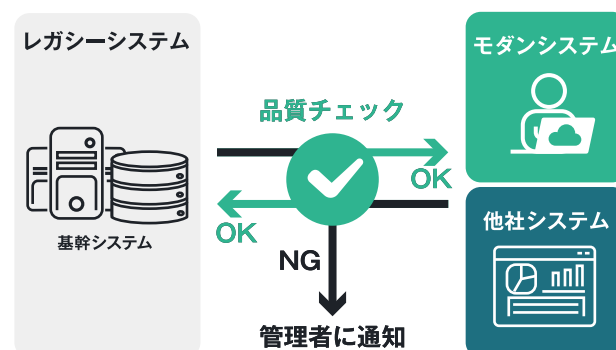
データ連携時にファイルの欠損がないか、抽出した値が指定条件と一致しているかを確認します。



データ連携時に、ファイル自体の欠損がないかを検知
データの値はモダンシステム側の要件と合致しているか

データの整合性(値の妥当性)

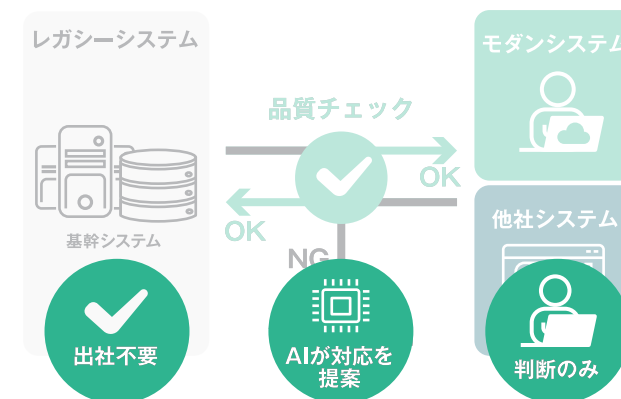
ファイルヘッダーの件数情報と実際のデータレコード件数が一致しているか、あるいは数字項目に文字が混入していないか等の妥当性をチェックします。例えば「このファイルは100件です」と登録されているのに、実際のデータが「90件」になっていないか、といったチェックです。



情報や属性にあった値が設定されているかをチェック

生成AIによるエラー対応の自動化

従来はエラー発生時に現場へ出社して原因調査を行っていましたが、生成AIにエラー内容を分析・判断させることで、出社不要で修正指示を出すことが可能になり、対応時間とコストを削減できます。例えば、エラーになった不正なデータを除外したい場合には、AIがそのデータを特定し、人はそれを指示するのみで修正が完了します。



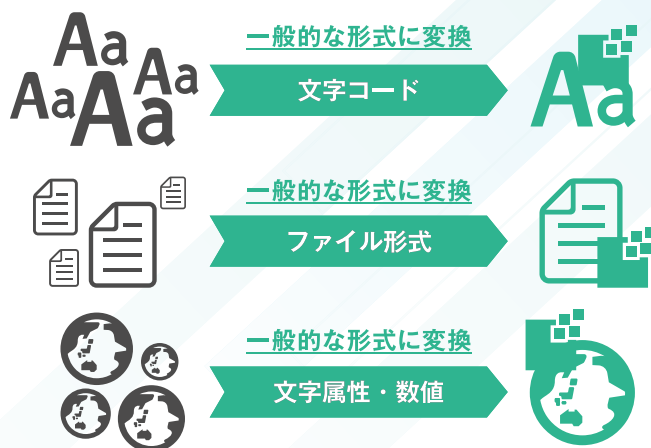
AI利用で「エラー処理」から「対応判断」へ

多様な文字コードの変換。 専門スキル不要の「ノーコード開発」による人材不足への対応。

レガシーシステムとモダンシステムでは扱うデータ形式が異なるため、連携先システムに合わせた変換が必要です。

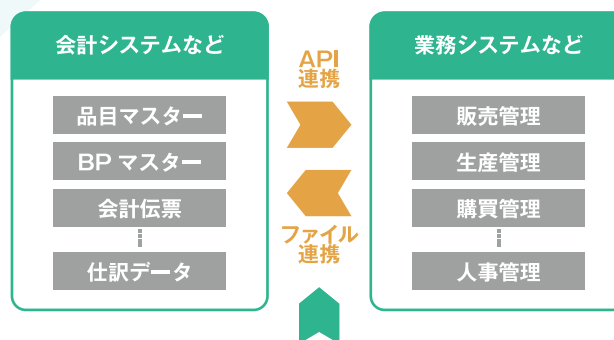
フォーマットと文字コードの変換

レガシーシステム特有のファイル形式(固定長など)や文字コード(EBCDICなど)を、モダンシステムで扱える一般的な形式に変換します。



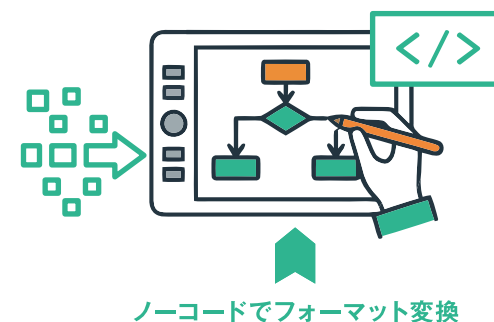
最適な連携方式の使い分け

要件に合わせて「API連携」と「ファイル連携」を使い分けます。例えば、ERPからのデータ取得は「動的なAPI連携」、ERPへのマスター更新(登録)は「バッチのファイル連携」といった柔軟な対応が求められます。



集計先の異なるシステムにも対応

なお、レガシーシステムにおける人材不足も深刻な問題の一つです。その人材不足を補うため、高度なプログラミングスキルを持たない担当者でも直感的にデータ変換・連携の設定ができるよう、ノーコード開発で実装するという考え方も必要です。こういった環境を用意することで人材不足にも対応することができます。



バラバラな運用を1つにまとめる 「業務全体の一元管理」

システム連携を構築した後は、必ず開発現場での「運用」が伴います。従来、システム開発と運用は「1:1」の考え方から始まりました。しかし現在は、基幹システムや相手にシステムにもAWS、Azureなど連携先が乱立し、運用部隊が増加してコストが雪だるま式に膨らんでいます。増えてしまったシステムを1つに集約するERP的な考え方もありますが、最近のトレンドは、適材適所なシステムを導入しそれぞれのデータを疎結合で連携させる構成です。

クラウド統合プラットフォーム(iPaaS)を活用してバラバラなシステムを繋ぐことで、業務全体の運用を一元管理(オーケストレーション)できるようになります。

◇まとめ

システムを無理に1つへ統合する時代から、必要なシステムをつなぎ、業務全体を最適化する時代へ。iPaaSによる業務オーケストレーションは、既存資産を活かしながら運用負荷を抑え、変化に強いデータ活用基盤を実現します。

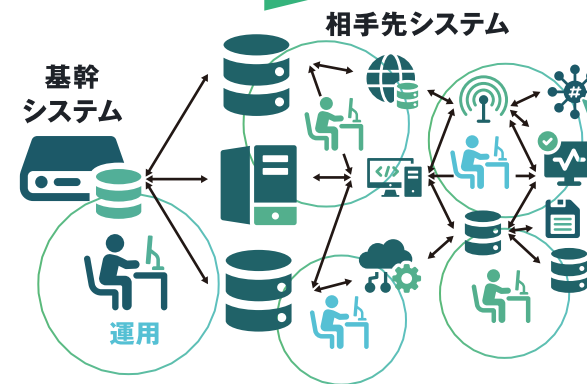
従来の考え方

1システム1運用で管理。



現在

システムの多様化でシステム乱立。運用も分散。



業務オーケストレーション

iPaaSで全てをつなげることで業務全体の運用・管理が可能



データモダナイゼーションを支える製品ラインナップ

データモダナイゼーションのポイントは、システムを刷新することではなく、既存資産を活かしながらデータ活用の仕組みを整えることです。セゾンテクノロジーは、データの抽出から品質管理、変換・連携、運用までを支援し、その実現をワンストップでサポートします。

オンプレミス・クラウド・基幹システム・業務システム 散在するデータをつなぎ、利活用の道筋を整えます

部門別や拠点別にシステムを導入した結果、企業内に数多くのシステムが乱立し分断されてしまったデータを、活用しやすいようにつなぎ、整える機能を持つのがHULFTシリーズです。

単にデータを連携するだけでなく、データの生成・加工・転送・活用までの道筋を、用途に合わせた製品の組み合わせにより柔軟に支援します。

複数ベンダーのソリューションを組み合わせる煩雑さを解消し、統一されたUIやサポート体制でシステムやデータを連携します。

SaaSやクラウドサービスが乱立する現代において、情報のサイロ化(情報が孤立・分断されること)を防ぎ、全社横断でデータを活用できる環境を整え、ビジネスの成長を後押しします。

ファイル転送ツール
22年連続国内シェア

No.1

導入社数

12,000社以上

採用実績

46カ国以上

データ活用の全工程をまとめてオーケストレーション

データ抽出

レガシーデータ抽出
非構造化データ対応
データ抽出



データ品質チェック

ファイルの整合性
データの整合性



データ変換・連携

文字コード変換
異なる I/F の連携



オーケストレーション(運用)

データ連携(サービス型)

HULFT
SQUARE

オンプレミス、クラウドなど
あらゆるシステムに散在する
データをつなぐiPaaS

データ連携(オンプレミス型)

DataSpider
Servista

社内外の多種多様な
システム・データベース・ファイルの連携を
自動化します

ファイル連携

HULFT10

オンプレミスからクラウド環境まで、
新旧様々なシステム間で
ファイルを安全かつ確実に転送・連携します

メタデータ管理

HULFT
DataCatalog

社内に散在する
さまざまなデータをカタログ化し、
データの検索・理解・活用をサポート

全社データの連携基盤構築と 自然言語による高度なデータ分析活用を実現



「お客さまの『あったらいいな』を超えて、日常の未来を生みだし続ける。」をパーパスとし、便利さと革新性で多くの顧客の信頼を勝ち得ているセブン銀行は、銀行口座データとグループが持つ詳細なレシート(買い物)データを強みに、2018年からAI・データ活用の全社的な定着を進めてきました。近年はさらに生成AIのビジネス活用にも注力しています。

お客様の課題

データ連携の効率化

勘定系や各種SaaSなど膨大で複雑なシステムを抱える中、手軽かつ内製で安全にデータを連携できる基盤が求められていた。

生成AI活用の安全な環境構築

自然言語を用いたデータ分析(プロンプトからSQLを生成して分析する仕組み)を検証したかったが、データの安全性を保ちつつ複雑なプロセスを実装できる手段を探していた。

◎ 選定の決め手

きっかけは会計システムの刷新でしたが、データ基盤とのブリッジ(橋渡し)としても「HULFT Square」の活用を決定しました。

圧倒的な使いやすさと信頼性

日本発のサービスであるためGUI(操作画面)が分かりやすく、内製化を進める同社に最適だった。

充実したサポート体制

外国製製品と比べて信頼性やサポート面での安心感が高かった。

◎ 活用方法と導入効果

多様なシステム環境の最適化

オンプレミスの勘定系システムから各種SaaS(請求書管理や経費精算など)まで、あらゆる環境をまたいだ手軽なデータ連携を実現。

安全な生成AI検証環境の構築

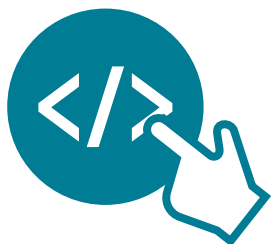
HULFT Squareのジョブ設定機能を活かし、自社の安全な環境のまま「対話によるデータ分析・インサイト生成」のプロセスを実行可能にした。

今後の展望

内製での本格的なデータ連携促進に向け、サポートやフォローに寄せる期待は大きい。データ連携基盤が整備され、手軽なデータ連携が実現されれば、可能性はますます広がる。HULFT Squareは柔軟かつ手軽なデータ連携ができるのはもちろんだが、分析前後のデータ処理にも利用できることがわかったため、ソフトウェア的な活用も探っていきたいと考えているという。現在検証を進めているのは銀行口座データだが、ATMデータも分析できるようになれば見える風景が違ってくる。

「たとえば都心と地方で利用されるATMサービスは異なります。また提携銀行が増えた時、手数料が変更になった時も利用状況が変化します。トランザクションだけで10億件もあるので普通に分析するだけでも難しいのですが、自然言語で尋ねて把握できれば、ビジネスが大きく進歩します。将来的にはグローバルで展開するATMも分析の対象にしていきたいですね。」と今後の展望について語っていただいた。

データの標準化支援から、 連携基盤の開発・導入、運用までをトータルでサポート



ノーコード開発

クラウド型iPaaS「HULFT Square」や、データ連携ツール「DataSpider Servista」を活用。ファイルの自動更新やログ管理を最適に設定し、顧客自身で運用・内製化できるよう支援します。



豊富な連携実績

30年以上の実績があり、レガシーシステムから「SAP S/4HANA」「Salesforce」「Concur」といった主要な最新クラウドサービスまで、規模や新旧を問わず柔軟に連携可能です。



エンジニアによるサポート

企画・検討フェーズから導入、運用、万が一の障害対応や基盤の拡張まで、専門のエンジニアがトータルでサポート。社内リソースやノウハウが不足している企業でも安心して導入できます。

どの製品・サービスを
選べば良いか分からない

機能や価格を
詳しく知りたい

データ分析や生成AI活用について
相談したい

販売パートナーや導入ベンダーを
紹介してほしい などなど...

オンライン相談で
疑問をまとめて解決

SAISON
TECHNOLOGY

株式会社セゾンテクノロジー

<https://www.saison-technology.com/service/product/>

- HULFT、その他HULFT関連製品は、株式会社セゾンテクノロジーの登録商標または商標です。
 - 記載されている会社名及び製品名は、各社の商標または登録商標です。● 記載されているシステム名、製品名などには、必ずしも商標表示(TM、®)を付記していません。
- このカタログの記載内容は、2026年6月現在のものです。本カタログの記載内容は予告なく変更することがあります。

©Saison Technology Co.,Ltd. 2026

お問い合わせ

<https://www.saison-technology.com/contact/hulft/hulft-square/>